
爆々ねこレース

秋月あきら (ししゃもにゃん)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

爆々ねこレース

【Nコード】

N0272E

【作者名】

秋月あきら（ししゃもにゃん）

【あらすじ】

水上都市アクアリウムにて、爆々ねこレースが開催されることになりました。みなさまの参加を快くお待ちしております。ちなみに、参加賞として『ねこ耳』を差し上げます。

ねこレースの栄冠は誰の手に!?

イタリアのヴェネチアの町並みをパクった観光都市 水上都市
アクアリウム。

街の中心にあるサン・ハルカ広場の石畳から、赤レンガで造られた鐘楼が天をぶち抜き、そのシンプル・ザ・ベストな感じのフォルムが近くのある寺院とは対照的なビューティフルさを備えている。

——メートルの鐘楼から見渡せる青空と統一された赤レンガの屋根とのコントラストを一望できてしまう古い町並みが美しい。そんな景色は思わず鳥になって羽ばたきたくなるほどで、年に何度か本当に鳥になる観光客が絶えず、塔の上には綺麗な花々が咲き誇っており、それもそれでビューティフルだった。

今日は『ハルカ降臨祭』というお祭り騒ぎの最終日で、街のどこでも賑わいを見せ、酔った客の裸踊りもばっちり見られる。

サン・ハルカ広場では祭りのメインイベントであるレースに出場する人々が、ねこ耳の飾りをつけて真剣な顔をしている。もちろん魚屋さんのおじさんから、怖い顔のお兄さんまでねこ耳着用だ。

ひよんなことから、このレースの出場することになった俺は、パートナーを務めてくれていたメイドさんの姫扇あやめさんと互いの腕を手錠で繋ぎ、スタートラインに立って猛烈に興奮していた。

もちろんあやめさんは美人で興奮してしまうが、俺が興奮しているのは違う理由だ。

このレースのルールはねこ耳を付け、パートナーと身体を手錠で繋いで、二人で協力し合いながら、夢と愛を祈りで力に変えてというハルカ教の教えに基づいたデンジャラスなレースなのだ。そして聞いて驚け!

このレースで勝利の栄冠を勝ち取った者には、カミサマとやらが願いごとを叶えてくれるのだ。すごいミラクルなレースだ。

俺はこのレースで華麗なまで見事に勝って、愛を成就させよう

と意気込んでいた。そして、意気込み過ぎて腹が痛くなってきた。腹を押さえて蒼い顔をする俺をあやめさんの瞳が見つめる。ちょっと恥ずかしい。

「光さま、大丈夫で御座いますでしょうか？ 駄目でも、お薬を飲んででも無理やり走れば平気です」

決して休めと言わないところがあやめさんらしい。

苦笑いをする俺。よく考えたら何で、こんな観光地でこんなレースの出場するハメになってしまったのか、今更ながら考える。俺は思う　これは神の啓示に違いない。そして、これは俺に神が与えたもうた愛の試練だ！

昨日まではペンギン学園中等部に通う一般生徒会長だったのに、今はねこ耳なんてつけて、わけのわからない障害物競走に主出場しようとしている。こんなジンサー普通は味わえない。ちよっぴりお得気分だ。

どこからか俺にカメラのフラッシュが嵐のように向けられ　眩しい。でも、これもファンサービスだ。俺は苦笑いをしながら手を振る。すると黄色い悲鳴が俺を取り囲む。

新天地でのファンを見ながら、俺は思う。　カツコイって罪だな、ふっ。

次から次へと巻き起こるイベントは嵐のように俺を包み、流れに流せれきっていたら、いつの間にかこんな状況になってしまっていた。

そう、思い起こせば、家の玄関を開けたら見知らぬメイドさんが立っていた時から、俺の運命は決まっていたのかもしれない。

5億円かよ!?

その日、俺こと近所の奥様方にも有名な白金光は、いつも通りの学校生活を営み、いつも通りに家に帰った。ただ、ひとつ違っていたのは、玄関開けたらそこにはメイドさんだったのだ。

見知らぬメイドに俺は戸惑った。ドアノブに手をかけたまま硬直する俺に、ぴゅーりりーっつと風が吹く。

こやつは何者だ。曲者か、泥棒か、親戚のお姉さんか誰かだったか。いやいや、百歩譲っても俺はこんな女知らん。

紺色の生地に白レースをあしらったメイド服を着て、頭にはヘッドドレスを乗せてしまっているこの人は、どっからどう見ても『メイドさん』だ。しかも、胸の谷間にものを落としたら遭難しそうだ。啞然とお口あんぐりの俺は、今ごろになつて思わず手に持っていたバッグを落としてしまった。それがグットタイミングな合図になったように、家の奥から両親登場。

ニタニタ笑っている親父はメイドさんの肩に慣れ慣れしく腕を回し、親指を立ててグッドを表すポーズをした。

「よくやった不肖の息子。カッコよさだけが取り柄だったお前だが、今日と言つ日は褒めてやろう。こちらにいらっしやるのは姫扇あやめさんだ」

「はじめまして光さま。わたくしの名前は姫扇あやめと申します。今日から光さまの身の回りのお世話をさせていただきます」

俺はこのあやめさんとやらの言葉を理解するのに数秒を要した。むしろ、理解しきれねえ!

「ちよつと待った、むしろ何があるうと待て! 身の回りの世話って何だ。事情をこと細かく、尚且つわかりやすく、短く四〇〇字以内で説明せよ!」

早口で捲くし立てた俺に、親父が近づいて来て肩に腕を回してきやがった。しかも息が酒臭いぞ。

「お前の転校が突然決まっつてな、さっさとこの家を出て行け」

「はあ？ 意味わかんねえよ。てゆーか、出て行けっつて、親父たちは？」

「転校するのはお前だけだ。転校先ではあやめさんが面倒みてくれるから心配せずに旅立っつてこい、我が息子よ。いざ、旅立ちの時だ！」

よし、冷静になれ俺。パニック状態になるとろくなことがない。

まず、俺の転校が決まっつたらしい。あとは、あとは……わかんねえ！

意外なところに事件の謎は隠されているはずだ。物事を別の方向から考える。……ちよつと待て、親父がなぜ家にいる？

「親父、仕事どうしたんだよ！？ 休みじゃないだろ今日？」

「会社なら課長を殴っつて帰っつて来た。一度殴っつてやりたかつたんだ、あのハゲ課長の頭を」

俺は笑っつしかなかつた。これまでだつて笑顔で何でも乗り切っつてきた。生徒会長の選挙だつて、笑顔で手を振っつてただけでどうにかなつた。だが、今日ばかりは顔が引きつる。

頭が真っ白になりかけていた俺の腕を突然あやめさんが掴んだ。

「では、参りましよう光さま」

「どこに？」

「水上市市アクアリウムで御座います。詳しいお話は移動中にいたします」

「わお！」

あやめさんは俺を強引に玄関の外に連れ出そうとする。俺は足を踏ん張っつたが、このメイドさん只者じゃない。なんつーバカ力だ。

俺は両親たちに手を伸ばすが、両親は俺に向かって手を振っつてやる。しかも満面の笑み。

やばい、このままでは拉致監禁されるに違いない。憶測だが。

俺は強引にあやめさんの腕を振り払っつて親父に飛び掛つた。

「クソ親父が！」

「何だとバカ息子！」

床に尻餅をついた親父の上に俺は馬乗りになり、二人は芋虫のようゴロゴロ転がった。転がったといつても、一回転もしないうちに廊下の壁にぶつかって痛い。

取っ組み合いの末に、俺が親父の上に馬乗りになった。

「詳しい事情を話せ！」

「バカ息子、父さんの上に乗るとはけしからんぞ。母さん助けくれ！」

俺と親父の視線がいつしよに母さんに向けられた。

母さんは眩しいまでの笑顔を浮かべながら、顎に手を当てて無駄なまでのポーズを決める。さすがは元モデルだ。

「うーん、社会見学だと思って転校したらいいんじゃないかしら？」

「って母さん！ 説明になってないし！」

声を荒げる俺の顔の前に一枚の紙が突き出された。紙の後ろからあやめさんの声が聞こえる。

「ここに書いてあることをお読みください」

紙には大きく『誓約書』と書かれている。内容は『五億円で一年間、息子を貸します』と書かれてある。しかも、下の方には両親の直筆サインが書き込まれている。

「なんじゃこりゃーっ！」

誓約書を奪い取ろうとしたところで紙が上に引かれ、俺の手は見事に空振りをしてしまった。その伸ばした腕を目にも留まらぬスピードであやめさんの織手が力強く掴む。かなり痛い。

「では、改めて参りましょう。さ、光さま、外にリムジンが到着している頃で御座います」

事情もままならないうちに、俺はあやめさんに腕を掴まれ床を引きずられた。

玄関の段差で腰を打ちつけ、靴も履かずに外に連れ出された。綺麗な顔をしてやるのが強引だぞ、このメイドさんは。

玄関の前にはリムジンが止めてあった。俺は否応なしにリムジン

の中に押し込められてしまった。絶対拉致監禁だ。

リムジンの外で両親に会釈をするあやめさん。動揺しちゃってる俺。そして、俺に手を振る両親。

あやめさんがリムジンに乗り込むと、すぐにリムジンは走り出した。

住宅街を颯爽と走るリムジンに、両親がいつもでも満面の笑みで手を振っていた。絶対あの笑顔だけは忘れねえ、帰ってきたら復讐してやる！

いざ、アクアリウムへ！

リムジンでだいが走った後、俺は列車で移動することになった。もう抵抗する気もない。なぜなら、聞き分けのない男はカツコ悪い、by俺。

俺を乗せた列車は大きな湖の上に敷かれたレールを走り、まるでキラメク水面の上を走っているようだ。個室の窓から眺める景色は神秘的でビューティフォーだった。

窓から首を出すと、湖の中心に人工的に造られた都市が見える。その都市はイタリアのヴェネツィアの町並みを思わせる。というか、観光ガイドでそう謳っているから間違いない。

椅子に腰掛け、紅茶まで飲んで寛いでいる俺に、目の前にいるあやめさんが話しかけてきた。

「では、そろそろ光さまが転校する本当の理由について説明いたしまししょう」

「大富豪のお婆さんが、ぜひとも俺を養子にしたいとか？」

「いえ、新代表になってもらうためでございます」

「新代表？」

新代表ってなんだ。代表っていったら、俺の中ではサッカーの代表選手とか、そんなのしか思いつかないけど、もしや、サッカー日本代表に俺が選ばれたとか！？

なわけないな。そもそもサッカーなんて体育の授業で嫌々やらされた程度だ。だとしたら、何だ。俺のスーパーな頭脳を持ってしてもわからん謎があるとは、世界はビックだ。

俺が勝手に妄想しているのを止めるかのように、あやめさんが軽く咳払いをして凜とした瞳で俺を見つめた。

「アクアリウムの住人の多くは『ハル力教』という宗教の信者であり、その宗教には白薔薇派と紅薔薇派という二大勢力が存在しております。その白薔薇派の代表の任期がつい先日切れましたので、光

さまが次の代表として選ばれたわけで御座います」

「無理」

俺は即答して、言葉を続けた。

「俺は自慢じゃないが、一般中学生の分際だ。確かに代表って言うたら、地位も名誉も手に入りそうな気がして、ホントはやりたいうな気がするが、常識的に考えて俺は無理」

俺の言葉にすぐさまあやめさんが反応して、どこから取り出した資料を読みはじめた。

「中学校の生徒会長していらしゃると書かれております。大丈夫です、同じようなものでございます」

キラキラ眩しい笑顔を俺に飛ばすあやめさん。その自信はどこから来る。

「生徒会長と同じにするのはどうかと思うが……？」

「いいえ、笑顔で手を振っているだけで殆ど大丈夫ですから、何も問題も御座いませぬ。わたくしも付いておりますし、怖いお兄さんに絡まれてもわたくしが一発でのしてさしあげますわ」

あやめさんは笑顔でさらっと言ったが、最後の方にスゴイ言葉が潜んでいたような気がしたが、触らぬ神に祟りなしだ。だって、絶対このメイドさんは只者じゃない。

何かを思い出しようにお口をO型にしたあやめさんは、突然上着の中に手を突っ込んで二足の靴を取り出した。俺の靴じゃん、というか、そんなところからかなぜ出る？ あんたはマジシャンか！？

「光さまのご自宅から先ほど届けさせました。どうぞ足をお出しください」

出せと言ったにも関わらず、あやめさんは俺の足を持ち上げて靴を履かせてくれた。

「どうもありがとう」

「どういたしまして」

俺とあやめさんの瞳が合った。まさに状況的にはトキメキな瞬間だった。

「あやめさんが顔を桜色に染めて小さく呟いた。

「カッコイイ」

次の瞬間にはあやめさんは凜とした表情に戻っていて、軽く咳払いをして、さつきと同じように淡々とした口調で話しはじめた。

「光さまが選ばれた選考基準は『カッコイイ』からで御座います」

白薔薇派の代表は仕事などできなくともいいので御座います」

「それってお飾りってこと？」

「そうとも言います。光さまのカッコよさは、全代表を凌いでおります。きつと良き代表にお成りになるとわたくしは信じております」

あやめさんは俺の両手をぎゅっと掴んで目をキラキラ光らせた。

俺はその瞳に負けそうになった。あやめさん美貌は俺の出会った女性の中でもトップレベルだ。しかし、俺は負けない。負けてなるものか！

「やっぱり、俺には代表なんて無理だと思う。ということ帰る」

俺はびしつと姿勢を伸ばして立ち上がり辺りを見回した。窓の外
の光景が目に入る。……走り出した列車は停止してくれるはずもなく、しかもここって湖の上じゃなか。なんたる不覚。

力なくして椅子に再び腰を下ろした俺は、頬杖をつきながら、大人しく流れゆく風景を惚けながら見つめた。

真夏のキラキラ輝く水面が眩しいぜ。コンチキショー！

恋のライバル！？

水上都市アクアリムはわざわざ古い町並みを再現し、レンガ建ての家々や装飾の美しい建物の数々、そして、街の中心に鐘楼が俺の心を鷲掴みにした。なんていうか、ああいう聳え立つ巨頭は男の口マンだと思う。

石畳の上を楽しそうにあるく家族連れやカップルの大半は観光客で、俺も次第に観光客気分になってくる。カメラを持ってこなかったことが今になって悔やまれる。無念だ。

あやめさんは先ほどから観光ガイドのお姉さん風に、建物などの説明をしてくれている。しかも、ガイドのお姉さんがよく持つてる旗も装備してるし。しかも、それを俺の靴同様に服の中、っていうか、胸の谷間から出したのを目撃してしまった。もしかしたら、二十世紀のネコ型ロボットの知り合いかもしれない。やっぱ只者じゃねえ。

「街は今、ハルカ降臨祭というお祭りの最中で御座いまして、住民たちも興奮しております」

「その住民っていうのは、もしかしてさっきからあちこちにいる変人たち？」

「変人……でございますか？」

「あの、ネコ耳の人たちなんスか？」

街を歩く人々に紛れてネコ耳の飾りを着用している人が歩いてる。お店の人はもちろん、お爺さんから赤ちゃんまで、ネコ耳装備。だが、オッサンはつけるの止めてくれ、目が腐る。ただし、可愛い娘はオツケーだ。

「ああ、あれはハルカ教の熱烈な信者の人たちでございます」

「あやめさんはつけてないんスか？」

「恥ずかしいですから。でも、光さまがどうしてもと仰るなら……」
なぜ、そこで顔を紅くする。明らかに『光さま』の部分から顔を

赤らめたぞ。しかも、気づけば、あやめさんの腕が俺の腕に絡んでるし。豊満な横乳が腕に……。

「あのお、腕を組むの止めてくれないかなあ？」

「どうしてで御座いますか？ いざとなった時、光さまをお守りするのかわたくしの役目で御座います」

「でも、さつきから周りの視線が……」

さつきから街を歩く女性たちの視線が痛い。絶対攻撃されてる。

しかも、あいつら独身女性の彼氏いない組だ。そつだ、絶対そつに違いない。

「カツコイって罪だな、フツ」

俺世界に浸ってる俺の腕をあやめさんが強引に引いた。

「あちらに見えますのが、白薔薇派の本部で御座います。ついでに説明すると、近くにある、あれが紅薔薇派の本部。このサン・ハルカ広場に聳え立つ鐘楼は朝と夕に鐘を鳴らすのですが、その音色は世界一で御座います」

途中で明らかに口調が変わっていたが、あえてそこには触れず、俺は鐘楼の近くにある白薔薇派と紅薔薇派の本部を見た。

…… 工事中かよ！

どちらの建物も絢爛豪華だけど、互いに建物の一部が工事の真っ最中だった。しかも、中断されてるっぽく、機材や重機類が放置してる。

「工事中なんスか？」

この質問をした途端、あやめさんは一瞬冷やかな表情をして、聞こえるか聞こえないかの微妙な声で何かを呟いた。

「わたしも給料を減らされたんだよ」

明らかに吐き捨てた言葉には毒がこもっていた。危険だ、このメイドさんは危険だ。俺はあやめ姐さんを決して怒らせてはいけなないと心に刻み込んだ。

俺たちは本部の前を素通りし、ひときわ目立つ荘厳な中東宮殿風の寺院の横を通った。てゆうか、素通りしちゃっていいのかよ、く

らしいの勢いで素通りした。だって、俺って新代表になったんじゃないのか？

「こちらの建物はハルカ教の総本山で御座います、サン・ハルカ寺院で御座います。西洋文化と東洋文化を混ぜ合わせたこの寺院は、大理石による二階建てで御座いまして、金色に輝いております壁などは本物の金を使っております。いくつもの柱が連なっている入り口のアーチは、金色のモザイクとゴシック様式の繊細な飾りで裝飾され、あの入り口は厳重な警備がされておりますゆえ、中にはラフな格好をしているだけで入ることができません」

「ラフな格好って……ネコ耳はいいのか。しかも、よくわからなかった説明だ。ゴシックって何だ？」

この建物からは東洋文化の仏教の雰囲気を感じられけど、その建築様式の基本は西洋風らしくって、キラキラうるさい裝飾が所々にある。金持ちの皮肉としか思えない。

建物の上に乗ったタマネギみたいな尖った金色の屋根が中東の宮殿風に見える。それから、寺院の一番高いところにあるアーチには、大きな猫像とその左右に並ぶ複数の仔猫の像が光の目に留まった。そう言えば、街のいたるところに猫像があったような気がする。

あやめさんの観光案内は目まぐるしく進み、やがて俺はゴンドラに乗せられていた。

水路を利用したゴンドラの左右には家の壁とかがある。上を見ると洗濯物が干してあったりするし。しかも、どうしてもステテコパンツから目が放せない……呪いだ。

ゆらゆらと揺られるゴンドラの上に乗ってるのは、どう見ても観光客で、その中の女性観光客グループが俺に話しかけてきた。

「学生さんですか？ よかったら一緒に写真撮ってください」

学生さんと言われたのは、俺が学生服を着たまま拉致されたからだけど、その後の話に脈絡がないぞ。だが、俺はついつい普段のクセでニッコリ笑ってしまった。

「いいですよ。あやめさん、シャッター押して貰えますか？」

「承知いたしました」

街をバツクに俺は女性観光客たちと写真に写ってしまった。しかも、爽やかなサービスマイルで。

ちよつと、疲れた気分になった俺はため息をついた。そんな俺の傍らに来たあやめさんが、そつと耳打ちする。

「撮ったフリをしてやりました」

その笑みはまさに仔悪魔チツクな笑みだった。絶対あやめさんって性格歪んでる。

俺たちは水上レストランでゴンドラを途中下車した。車じゃないから、下車じゃないのか？

水彩画で描かれたような透明感のある建物や家具が、爽やかなカラーを前面に出してるオープンカフェが俺的に気に入った。

店内は観光客で賑わっていた。この都市に観光客がいない場所はないのか？

ぐるっと店内を見回しながら俺があやめさんに連れて来られたのは、まさに俺お気に入りオープンスペースだった。しかも、そこには二人の女性が座っている。

俺のハートを一撃にされたーっ！

ビューティフルな女神様のご登場だ。栗色の髪をポニーテールにまとめちゃつてるところが俺好みだし、前髪で少し太めの眉毛が隠れてるのもポイント高し。そして、ポイント二倍サービスなのが眼鏡チエーンが付いた眼鏡から覗く潤んだ大きな瞳。ステキだあ。

もう、すでに俺の目には片方の女性しか目に入っていない。運命だ、デステイニーだ、って運命を英語にただけじゃん！

ビューティフルエンジェルここに光臨だ！

立ち上がった二人の女性は順番に挨拶をはじめた。

ひとり目は空色ドレスを着たショートカットの女性。

「ボクの名前はローズマリィ。紅薔薇派の代表をしている」

鈴が鳴るような澄んだ声。しかも、ボクってというのが以外に俺の胸をキュンとさせてしまった。だが、頭にネコ耳。

ふたり目が先ほどのポニーテールの女性。俺的女神サマだ。

「わたしはローズマリーさまの付き人をさせていただいています、鈴木明日菜と言います」

くわっば！

意味のわからない奇声を発してしまいそんなほどの声だった。可愛らしすぎるのは罪だぞ。でも、可愛いから許す。って矛盾してるし。

俺は決意しちゃうぞ、何があろうとこの都市に留まってやる。愛の力は偉大だ。

闘志メラメラで意識が飛んでしまっていた俺にあやめさんの肘鉄が入る。

「うっ……」

「光さま、ご挨拶を」

そう言っであやめさんは、俺だけに見えるようにして掌に書かれている文字を見せた。俺はそれをそのまま棒読みする。

「私は白薔薇派の新代表に就任した白金光です。今日はお日柄もよく、こんな良き日にローズマリーさまにご挨拶できて」

その後には書かれている文字を読むべきか俺は戸惑った。あやめさんは俺の腹に肘を突きつけてるし。でも、読めるわけないだろ、こんなもの！

あやめさんの掌には、こう書かれてある。

そんなこと思っただけねーだろバカ、お前の顔なんざ二度と見たくねえんだよブス。オカマのクセして粹がっつんじゃねえぞ（死）！

酷い文章だ。しかも、最後の『オカマ』ってというのが気になる。

俺が先を読まないの、あやめさんは仕方なく笑って誤魔化した。「新代表は少々緊張しておりますので、堅苦しい挨拶は抜きにして、お食事をしながら楽しいお話でもいたしましょう」

あやめさんに勧められるままに俺たちは席についた。その時にあやめさんが俺の足を踏んだのは、絶対ワザとだ。だが、この『素晴

らしい』メイドさんには何も言えない。

席についたところで、あやめさんが俺にそつと耳打ちする。

「あっちにいる代表は女装が趣味のオカマです。お気を付けください」

気をつけるって何を？

てゆーか、男なのかあれは！？

俺の中でローズマリーへの注目ポイントが上昇した。

空色ドレスに包まれた小柄で華奢な身体はどう見ても女性で、大きくてエメラルドグリーンの瞳も可愛らしい。しかも、声も可愛らしかった。完全に騙されてた。

会話が弾まねえっ！

あやめさんはローズマリーにガン飛ばしてるし、ローズマリーは涼しい顔して食事してるし、俺は俺で愛しのエンジェルを見つめてしまっていた。

明日菜「ちゃん」はストローを両手の指先で掴み、飲み物を飲んでいるところで俺と視線が合い、少しはにかんで眼鏡の奥から上目遣いをするところも素敵だ。そして、濡れた唇が開かれる。

「どうかしましたか？」

「えっ！？」

惚けていて不意打ちを喰らった。慌てて俺はクールビューティータンな表情を作って対応する。

「いや、明日菜ちゃん……じゃなくって、明日菜さんって可愛らしいひとですね」

「……そんなことないですよ」

そう言ったきり、明日菜ちゃんは顔を伏せてしまった。しまった、しまったーっ！

嫌われたかーっ！？

「あ、あの、明日菜さん？」

「……………」

返事がない。完全に嫌われたあーっ！

明日菜さんは俯いたまま俺のことを完全無視。これを嫌われたと言わずなんと言う？

だが、しかし！

俺はあきらめないぞ。今日は駄目でも明日がある。今度会った時に愛の告白をすれば済むことだ。

いやいや、告白は早いな。まずは二人で合う時間を増やしていつて、明日菜さんの家に遊びに行つて、ついつつかり泊まってみたり。そして、ラストは告白だ！

よし、この作戦で行こう。では、まず、デートの約束を。

「明日菜さ　ぐあっ！」

俺は背後からの攻撃を受けた。不意打ちだ、曲者だ、暗殺だ。俺を狙つて来た国家スパイに違いない。……そんなわけないな。押し飛ばされた俺は敵を確認した。

空色ドレスにねこ耳の女性（？）二人組み……つて、どっからどう見てもローズマリーの関係者！

「きゃーっ、ローズマリーさまですよね！？」

「宜しかったらサイン貰えますか？」

きゃぴきゃぴ、と言った感じの二人組みだ。

明日菜ちゃんは素早く油性ペンを取り出し、ローズマリーが華麗にそれを掴み取る。そして、軽やかなタッチでローズマリーは女性二人組みの服にねこのイラストを描いた。

よく目を凝らしてみると、ねこのイラストの脇に『露渦魔璃李』と書かれている。当て字だ、絶対に当て字だ。

「きゃーっ、ありがとうございます！」

「この服を家宝にして一生大切にしますっ！」

スゴイ大盛況だ。ローズマリーって人気者なのか？

ローズマリーは爽やかな笑顔で二人の女性と握手をした。

「明日のレース、応援してくださいね」

ローズマリーの笑顔炸裂攻撃！

女性二人組み悩殺、失神！

俺、ビツクリ！

女性二人組みが突如失神した。ローズマリーの笑顔炸裂攻撃に当たったに違いない。なかなかやるなローズマリー。恐るべしだ。いやいや、そんなことよりもレースって何だ？ 後であやめさんに聞いてみよう。

倒れた女性は速やかに店員たちの手によって運ばれていった。

ローズマリーは何事もなかったように紅茶を飲み、俺の方を見て一瞬、鼻で笑ったような気がした。もしや、これは喧嘩を売られたか。挑戦状を叩きつけられたのか！？

俺のこの中でローズマリーの声が響いた。

ボクの方がキミより美しい。

そんなことを思っていたような顔だったぞ、さっきの笑みは。

いや、きつと俺の思い込みだ。妄想だ、トキメキだ、ロマンスだ！ロマンスと言えばマイハニーエンジンジェル明日菜ちゃん！

って気づいたら、みんな食事終わってるし。終わらないの俺だけ！？しかも、そろそろお開きにしましよかって話し合いになってるし！？

会食は終わってしまい、ローズマリーが席を立ったその時だった！ガシャン！

グラスに入っていた飲み物がモンスターと化して俺に襲い掛かった。

服がびしょ濡れになって、しかもオモラシしちゃったみたいになってるし！

すぐさまナプキンを手を取った明日菜ちゃんが、戦場に赴く戦士の如く立ち上がった。

「大丈夫ですか、白金さん！？」

明日菜さんは俺の着を丹念に拭き、下の方に手を動かそうとして硬直する。さすがに拭けない。というか、拭かれたら俺も恥ずかしい。

「う、ごめんなさい！」

明日菜ちゃんは顔を真っ赤にして、壁際まで下がって、後頭部をゴンと壁にぶつけてうずくまった。後ろ下がり過ぎ……。

うめき声を亡霊のように出す明日菜ちゃんには誰も触れず、ローズマリーが俺にナプキンを手渡して頭を下げた。

「ゴメン、まさかこんなことになって申し訳ない。新しい服をかうお金をお渡ししよう」

「乾けばだいじょぶですから、気にしないで下さい」

俺は爆笑顔で対応したが、ローズマリーが一瞬、人を小ばかにするような笑みを浮かべたのを目撃した。俺は確信した。絶対コイツ、ワザと溢したなあーっ！

拳に力が入る。だが、笑顔だ、俺はいつでもクールビューティーでなければならぬのだ。

俺の闘志がメラメラと燃え上がる。ここに俺は宣言する。

そう思った時には手が勝手に動いちゃって、俺の指先はローズマリーの鼻先に突きつけられていた。

「俺はお前をライバルだと認める！」

……しまった。ついボロが出てしまった。

後悔先に立たずとは、まさにこーゆー時に言うのだと実感してしまった。

ねこ耳に手錠って

ローズマリーは高らかに笑い去って行き、明日菜ちゃんも慌てて行ってしまった。

その後、俺は残っている食いもんを手をつけながら、あやめさんの話に耳を傾けていた。

「明日は『ハルカ降臨祭』の最終日でございます。最終日には遙か彼方からいらっしゃる神をお迎えするレースが行われます。ズバリ、光さまにはそのレースに出させていただきます」

そう言えばローズマリーもレースがどうとかって言ってたような気がする。もしか！

「あのローズマリーとやらもレースに出場するのか！」

「ええ、もちろんで御座います」

「その勝負買った！」

この決断に俺は0・1秒もかけなかった。まさに即答だ。

ジンセーの決断はその場の乗りだ。俺はいつでもそうやって生きてきた。今回もそのノリで、この難関を見事突破し、正義の名のもとにローズマリーを成敗してくれる！

「では、レースについての詳細をご説明します」

「あ、うん」

あやめさんは淡々としていて、燃え上がっている俺との絶対的な温度差があった。どういうわけか、あやめさんのペースに引きずり込まれてしまう。まさに底なし沼に足を踏込んだじゃったよ状態……なのかつ！

「レースは二人一組で走りゴールを目指すという障害物形式をとっております。街中を走るコースにはトラップが仕掛けられ、最悪の場合は……ということも御座いますのお気をつけ下さい」

「今の間はなに？ 明らかに嫌なものを含んでますよ的な間はなんすか！？」

「お気になさらずに、では次のご説明を」

さらっとせせらぐ小川のごとく流す気ですか、あなたさまは！

などということは口に出さず、俺は黙ってあやめさんの言葉に耳を傾けた。

「光さまとペアを組ませていただくのは、このわたくしで御座います。何か不満な点は御座いますか？」

「滅相も御座いませぬ。あやめさんは最強っス」

あやめさんはニコリと笑い説明を続けた。

「レースの出場者はねこ耳を着用することが義務づけられ、ペア同士は身体の一部を手錠で繋ぐことをルールとしております」

ねこ耳着用到手錠つて、アブノーマルな世界だな……というか、なぜにそんなルールなの？

頭の上にはてなマークがグルグルかけっこしてしまし、この質問をあやめさんに投げかけようとしたが、あやめさんは「質問は一切答えません」というオーラを全身から漲らせている。しかも殺気も混じってるし。

「質問は御座いますか、ありませんね、では次のお話を。ここからが重要なお話なのですが、このレースの出場者にはハルカ教関係者が多く出場しております。そして、このレースの裏の目的は派閥争いなので御座います。このレースで優勝を収めた派閥は他の派閥よりも優位な立場になることができ、その派閥の発言権などは一年間もの間……暗黙の了解により……絶対的な権力を持つので……御座います」

あやめさんの身体はわなわなと震え、その口調は低く禍々しい怨念を秘めているように思えた。てゆーか、この場にいたら殺される。首をキュツとされて、絶対に屠られるう！

歯軋りをしたあやめさんは修羅のごとく顔つきで、テーブルをグーでぶっ叩いた。

「あのオカマが優勝したのだよ！」

テーブルの上が局地的な地震に襲われ、店内にいた客がいつせい

に振り向いた。

明らかに口調が違った。本性だ、本性だよ、怖いよ、怖いよこのメイドさん。

刃物を片手に血まみれになったメイド服が頭に浮かぶ。メイドは笑っていた。恐ろしい地獄絵図だ。

何事も無かったように席についたあやめさんは、お清まし顔で微笑んだ。

「それから、優勝者は神によって願い事を叶えてもらえるので御座います。叶えてもらえる願い事の範囲はありますが、中には恋愛成就の願いを叶えてもらった方も過去にいたそうですね」

「その話乗った！」

「そう言うと思っております。光さまは鈴木明日菜に首っただけ、うふふ」

バレていたのか。さすがはメイドさんだ。ザ・観察眼と言ったところだな。

俺はあやめさんのまいたエサに食らいつき、レースに出場に意気込んだ。この状況から言って、レースは俺のために開かれる手で力強く叩きながら立ち上がった。

「去年と言っても過言ではない。つまり、優勝するのは、世界が誇るクールビューティな白金光だ！」

食事を済ませた俺は店内を出てすぐに、あやめさんに連れられるままに、あっちこっちそっちに連れて行かれ、新代表のお披露目会とか、二次会とか、三次会とか、カラオケとか、とにかくめくるめくスケジュールの嵐。

俺はわけのわからんうちに、激流に流されるだけだった。

そして、ふと気づく。

あつ、家に帰んなきゃ……ま、いつか。

ついに開幕ねこレース！

レース当日、横断幕には『爆々ねこレース』と大きく書かれている。そんな名前だったのか、このレース。

サン・ハルカ広場は人人人の人の群れ。出場者は全員ねこ耳着用で、応援している人の中にもねこ耳がいる。ちなみ、このねこ耳は街のコンビニなどで1980円で売っているらしい。

これだけの人がねこ耳着用だと怖い。ていうか、変人奇人サーカス。って俺もその中に入ってるのか！

俺が辺りを見回していると、あやめさんが俺の腕に手錠をかけた。まるで犯罪者扱い。

自分の腕と俺の腕を繋いだあやめさんの顔は真剣だった。しかし、ねこ耳。だけど、萌え。

正直に告白してやるう、俺はねこ耳メイドもツボだ！

だが、自分のねこ耳は解せん。たしかに俺は何でも似合うが…
…恥ずかしい。

ふざけたレースだが、優勝者の与えられる特権はスゴイ。俺は愛を勝ち取ってみせる。俺は明日菜ちゃんのを俺だけのものにしてみせるぞ！

だが、意気込み過ぎたせいか、腹が……痛い。昔から本番に弱くて、今回も腹の調子が悪い。

「光さま、大丈夫で御座いますでしょうか？ 駄目でも、お薬を飲んででも無理やり走れば平気です」

レースに出ないと絞めますよって感じの目だった。そんな目で見られたら、死んでも走るって。

「走るっすから、そんな目で見ないでください……」

「そんな目とはどのような目で御座いますでしょうか。優勝しないと屠るぞって目で御座いますでしょうか？」

あやめさんは微笑を浮かべた。俺はそれを見て凍る。優勝しない

と殺されるうーっ！

大丈夫だ俺。落ち着け俺。こういう時は楽しい思い出を……。

そうだ、明日菜ちゃんと夕焼けに染まる浜辺を歩き、そこで二人は……ってこれって思い出じゃなくって妄想じゃん。

そうだ、明日菜ちゃんだ。このレースは愛の障害物競走。この難関を乗り越えて、見事、明日菜ちゃんをゲットだぜ！

どこからか向けられたカメラのフラッシュで俺の目が眩む。後援会のビューティフォーレディーたちだ。笑顔で手を振り返さなければ。

「がんばりますので、応援よろしくお願いします」

腹の痛みに負けた俺は苦笑になってしまったが、それでもレディたちは黄色い悲鳴を上げてくれた。カツコイイって罪だな、ふっ。

辺りを見回していると、ローズマリー&明日菜ペアもいた。俺としては心が痛む。

想い人敵同士だなんてジンセーは過酷だなと想いつつ、はっとした。ローズマリーの見た目は女でも中身は男。まさか、二人はそういう関係なのか！？

そう言えば、俺が明日菜ちゃんとトキメキで運命的な出逢いをした時、明日菜ちゃんは俺を見てオドオドしていたような気がする。なのに、今はローズマリーと楽しそうに、おしゃべりしちゃってるっぽいぞ！

ああ、ローズマリーさま、こんなところでダメですったら、もぉ。みたいな！

……今のは俺の勝手にモーソーだが、ないとは言えない。そうだ、そくに違いない。二人はデキてる。

あの海上レストランでも、明日菜ちゃんに嫌われていたような気がした。ああ、悪夢が現実に感じて。

俺の心は泥沼の底に沈み、失意と言う名の檻に拉致監禁。近くではローズマリーって名前の悪魔が見張りをしている。ビバ・ドン底！

「光さま、光さま大丈夫で御座いますか？」

頂垂れた首を持ち上げると、そこにはあやめさんの美しい顔が。そうだった、俺にはあやめさんというパートナーがいるじゃないか。あやめさんに恋愛対象を乗り換えようって話じゃなくて、あやめさんとだったら、このレース勝てる！

そうだ、勝って恋愛成就を願うんだ！

よし、元気モリモリパワーがモリモリしてモリモリだ！

「あやめさん、このレース絶対に勝ちますから」

「なんと心強いお言葉。前代表もそんなことを申して、負けました」
「が」

どうしてそこで釘を刺す？

いや、ここで俺の脳裏にある考えが浮かぶ。

「前回のレースにもあやめさんが出てたんスか？」

「ええ、前代表とペアを組ませていただきました」

「それで、ローズマリーペアに負けました？」

「ええ、ローズマリー&明日菜ペアに負けただけで御座います」

まさか、このあやめさんが負けるとは、前代表がへっぽこだったのか、ローズマリーがスゴイのか、実は明日菜ちゃんが魔法少女で……なんてことはないな。

駄目だ、負ける。負けてしまう。絶望的だ。ジンサーお先真っ暗だ。

恋愛成就なんて儚い夢のまた夢。

何でこんなレースに出るハメになったのか、今更ながら疑問に思う。しかし、俺はすでにスタートラインに立っていた。

男の華咲かせてやる！

スタート地点は熱気ムンムンで息が苦しいほどだ。

「光さま、もうすぐレースがはじまります。ご準備はよろしいでしょうか？」

「おう！」

キラリーンと齒を輝かせた俺を見て、あやめさんは満足そうにう

なずいた。あとは、スタートの合図を待つまでだ。

俺はちらつと横目でローズマリーを見た。日傘かよ！

ローズマリーは日傘を差していた。あのまんまで走る気なのか、非常識だ。

……ねこ耳、手錠の方が非常識だった。

スタートラインの端に銃を天に向けて構える人が立った。もうすぐ、スタートだ。

ヨーイ、ドン！

の合図で銃の先から火花ならぬ、万国旗が出た。マジシャンかあいつは！？

などと思っているうちに、俺の身体はあやめさんによって強引に引っ張られていた。

「光さま、全速力で走って！」

「ごめん、万国旗に見惚れてて」

「そんなことは、どうでも宜しい。走れ！」

あやめさんの叱咤に脅えて走り出す俺。だが、その俺のせいでスタートが出遅れた。

人だかりの中に飲み込まれた俺は、満員電車で揉みくちやにされてるようになって、にっちもさっちもどーにもならなくなってしまう。しかし、あやめさんは凄まじい。

あやめさんは手をグーにして、辺りにいる人たちをなぎ倒している。

「オラオラ、退きやがれ愚民どもが！」

口調も怖い。

般若と化したメイドさんに俺は恐る恐る聞いた。

「あのお、あやめさん。それって暴行罪では？」

「お堅いことを申さずに。これは『スポーツ』ですから」

「……………」

そつという問題なのか！？

あやめさんにお陰で道が開き、どうにか人だかりを抜け出すこと

ができた。

ここであやめさんはポケットから取り出した爆竹に火をつけて後方に放った。

けたたましい爆発音が鳴り、中華街の旧正月みたいな、ドンチャン騒ぎで俺の後ろを走る人たちが地面から飛び跳ねて踊っている。

「爆竹もアリなんスか？」

「ええ、障害物競走ですから」

俺の質問にさらっと笑顔で答えるあやめさん。たかが障害物競走と侮っていた俺がバカだった。もっとちゃんとルール確認をしておくべきだった。

周りを見渡すと、木刀を振り回している人とか……って俺に向かって来てるじゃん!?

木刀を持ったオツサンが俺に襲い掛かってきた。頭に乗せたねこ耳が緊迫感ない感じだが、その下のついてる顔は恐ろしい。

「殺されるう！」

俺に振り下ろされた木刀をあやめさんが片手で掴み、そのままオツサンの巨体を投げ飛ばした。恐るべしメイドさん。

「ご無事で御座いますか光さま？」

「ああ、なんとか」

って、俺よりも投げ飛ばされたオツサンの方が心配だ。石畳の上にもろ激突って感じだったもんな。

「今のは紅薔薇派の妨害で御座います」

「マジで殺されるかと思った」

「殺されはいたしません、病院送りにされることはありませんので、お気をつけください」

だから、そういうことをさらっと言うの止めてくれ。

あやめさんはさらっとした顔で、再びポケットの中から何かを取り出した。そして、また後ろにはらまく。

また後ろの人たちが飛び上がって踊ってる。けど、今度は苦痛に顔を歪ませている。そう、あやめさんが地面にまいたのはまきびし

だった。

まきびしつていうのは、鉄をトゲトゲに加工したもので、忍者が追ってから逃げるために地面に巻くアイテムだ。俺も昔は忍者に憧れたもんだが、まさかあやめさんがまきびしを使うとは……まさか！？

メイドⅡ忍者か！？

あやめさんを見ると、そうかもしれないと思えてくる。

美しい街中を駆け巡るねこ耳軍団。美しい町並みに、俺たちは不釣合いだと思う。そして、街中に不釣合いな物が、前方に見えてきた。それは網だった。

障害物競走に網はお約束って言ったらお約束だが、あの網、変だ！
マグロが掛かってやがる！？

マグロだけではない、タイにヒラメが舞い踊る……お遊戯会か！
網の近くに立ってる水着のお姉さんがホイッスルを持って監視している。ちゃんと網を潜らない人がピコピコハンマーで殴られている。

網の下を俺たちは上手に潜り、あと少しで出られるところ
で、あやめさんが悲鳴をあげた。

「きゃ~~~~っ！」

「なんスか！？」

俺はあやめさんの脚に巻きつくによろによるを見た。それはまさしくタコの足。

「わたくし、軟体動物が苦手なんですぅ〜！」

あやめさんの弱点発覚。

タコのサイズはビッグだ。深海にはこんなビッグなタコが棲んでいると聞くと、ここって水上都市だけど、湖だったよな。ワザワザ漁師さんが海から釣り上げて来たのか。ちなみに俺の想像だと一本釣りだ。

あめさんが引つ張られると俺も自動的に引つ張られる。これって危機的状况じゃん！

俺は網に手を掛けて踏ん張るが、手が千切れそうなくらい痛い。たかが、タコに分際で、後でタコ焼きにしてやる！

タコの脚は八本。一本はあやめさんのふとももに巻きついて残りの七本も人の脚に巻き付いているではないか。しかも、みんな美人のお姐さん。

大タコは美人ばかりを狙うエロタコだったのだ。ちょぴり羨ましいぞ。

「いやん、えつち！」

あやめさんが色っぽい声で悶える。

俺は判断した。このエロタコは女性の敵だ。許してなるものか！

だが、俺は網にしがみ付いているので精一杯だった。

成す術もないと思われた時、タコの脚があやめさんの脚から外れた。タコ本体を見ると、何者かがタコに傘を突き刺していた。傘：

…日傘……ローズマリーか！？

ローズマリーはタコに日傘を何度も突き刺し、タコ足に捕まっていた明日菜ちゃんを救い出していた。明日菜ちゃんも捕まっていたのか、自分のことに精一杯で気づかなかった。

てゆうか、あの傘って武器だったのか。

一足先にエロタコの脅威から逃れたローズマリー&明日菜ペアは、網を抜けてさつさと先に行ってしまった。しかも、ローズマリーの野郎、俺の顔を見て一瞬笑ったぞ。

「光さま、わたくしたちも先を急ぎましょう」

「おう！」

俺たちは全速力で走った。

スーパーミラクル大作戦！

観光客を乗せたゴンドラが浮かぶ運河の横を走る抜けるところで、俺は観光客から手を振られ、あやめさんに肘で突付かれながら笑顔で手を振り返す。レース中にファンサービスなんてしてる場合なのか。と思いつつもレースは進み、縄抜や小麦粉の中に入ったマシユマロを探したり、紐にぶら下がっているパンを手を使わずに食べるところでは、パンを食べ終わったところで残りのパンをあやめさんが地面に全部落したり、全てはいい思い出だった……ってまだレースは終わってない！

レースが進むに連れて、道端に倒れている参加者が増えてきた。前を走る派閥の人たちが争っているに違いない。そのお陰で俺たちは順位を伸ばしていくことができたのだ。

そして、気が付けば俺たちはトップに躍り出ている。ここに行き着くまでに、どれだけの人々が犠牲になったことか……などと、しみみお茶を飲んで語ってる雰囲気ではない。俺たちの横にはローズマリー&明日菜ペアがぴったりとくっついてるのだ。

ローズマリーの手が素早く動いた。その手にはしっかりと折りたたまれた日傘が握られている。

ビュツと風を切る音。

手錠をはめた俺の腕が強引に引っ張られる。

カキーン！

手錠の鎖が日傘を受け止め、あやめさんはそのまま日傘を奪い取って後方に投げ飛ばした。が、それだけでは済まなかった。

俺の身体が宙を浮く。

「な、なにするんすか!？」

「ご安心を！」

そう言ったあやめさんは俺を脇に抱きかかえたまま可憐に回転した。それは攻撃だった。俺の足がローズマリーの顔面を襲う。んな

アホな！

ローズマリーは腕で俺の蹴りをガードするが、勢いに押されて地面に明日菜ちゃんごと転倒した。俺はこんなことするつもりはなかった、不可抗力だ、マイエンジェル明日菜ちゃん！

だが、心配も必要なかったらしく、ローズマリー&明日菜ペアは五秒もしないうちに立ち上がったと思っただら、ローズマリーが靴を飛ばしてきやがった。

ローズマリーの飛ばした靴は放物線など描かず、一直線に俺の後頭部にヒット！

「ぐわっ！」

俺の頭は地面に引き寄せられた。つまり、転倒。
がしかし！

あやめさんは俺の転倒など無視して走り続ける。

「ちよつとあやめさん、ストップ！」

「うるさい！」

……俺は何も言わずに引きずられることにした。

俺たちの真後ろを走るローズマリーが残った靴を飛ばしてきた。

だが、二度目はない！

バシツと華麗に片手で靴を受け止めた俺は、ローズマリーに向かって投げつけてやった。だが、それも受け止められた。

「ボクに靴を投げつけるなんて、いい度胸だね、キミは」

「貴様から飛ばして来たんだろうが！」

「足が滑ってだけ……なんてね、フフ」

バカにされてるのか俺は！？

こいつムカツクぞ、なんだか知らんがムカツク。言っとくが、これは嫉妬とかじゃないぞ、明日菜ちゃんと一緒でいいなんて、これっぽちも思っていないからな。思っていないぞ。思っていないたら、思っていない！

ローズマリーが靴を持った手を大きく振りかぶった。

「ああ、手が滑った！」

「ウソつけ！」

投げられた靴を受け止めた俺はそのまま投げつけた。が、やはり受け止められた投げ返される。

「ばか」

感情がこもってない言い方が必要以上にムカつく。このローズマリーとやらは俺の手で消してやる。

「オカマ野郎！」

「失礼なヤツだなあ。ボクは性別を超えた存在なんだ」

俺の投げた靴を受け止めたローズマリーが再び靴を投げようとした。けれど、それを横にいた可憐な手が止めた。

「ローズマリーさま、これ以上はしたくないまねはお止めください」

ローズマリーを止めたのは明日菜ちゃんだった。だが、靴はローズマリーの手を離れた。

俺の近くで鈍い音がした。

後頭部を押さえる般若が振り返った。

「ふざけんな、カマ野郎！」

怒号するあやめさんを見て、明日菜ちゃんはかなりビクついた表情をしたが、横にいるローズマリーは涼しい顔をしている。

「ボクをカマ野郎だなんて心外だなあ。ボクがオカマじゃないことは、あやめがよく知ってるじゃないか？」

「わたくしはローズマリーさまのことなど存じ上げません」

明らかにあやめさんの口元は引きつっていた。その顔は怒ってるんじゃない。何かに脅えていた。

あやめさんが脅えるなんて、ローズマリーの言葉の裏に何かか隠されていたのか？

「ボクたち」

ローズマリーはなんか言おうとしていたみただけど、突然あやめさんがローズマリーに飛び掛った。ちなみに俺も自動的に飛び掛った。

あやめさんに飛び掛られたローズマリーは転倒で、自動的に明日

菜ちゃんも転倒。あやめさんも転倒して、俺もついでに転倒。

四人はダンゴムシのようにゴロゴロと、グッドなタイミングで坂になっていた道を転がった。

俺は混乱に乗じて明日菜ちゃんを庇うために抱きしめた。いい香がするなあ。

「うがつ！」

あられもない声を出す俺。バチが当たった。

住宅の壁にぶつかってどうにか動きが止まった。その代償は俺の腰。かなりの勢いで打ち付けた。だが、どうにか明日菜さんは守りぬいたぞ！

「明日菜ちゃん……じゃなくって、明日菜さん大丈夫ですか？」

「ええ、あの、その、身体を離してもらえますか？」

真っ赤な顔を目の前にして、俺も顔を真っ赤にしてすぐに明日菜ちゃんから離れた。

「光さま、わたくしの腕までお引きにならないでください」

「ごめん、あやめさん」

そう言いながらも俺は、さんざんさつきまで引っ張り回したのは誰だよ、と思っただが、それは口にできない。しかも、よく見るとあやめさん負傷！？

地面に横たわるあやめさんは足首を押さえて苦しそうな顔をしていた。

「どうしたんスカ、あやめさん？」

「少し足首を捻ってしまっただよつで」

そう言っただち上がるうとしたあやめさんだが、あやめさんは足元から崩れるようにして再び地面に倒れてしまった。

「わたくしとしましたことが、なんたる不覚で御座いましょうか」

あやめさんは胸元から手錠の鍵を取り出すと、俺と自分を繋いでいた手錠を外した。

「光さま、わたくしはもう先には行けません。どうか、この先はお一人で……うつつ」

「あやめさん！」

あやめさんはぐったりと地面に倒れた。

……そうじゃなくって、手錠外しても意味ないじゃん。一人で行って言われても、ペア組むのがルールなんでしょ？

俺は倒れたあやめさんの身体を揺すった。

「あやめさん、大丈夫っすか？」

すると、あやめさんは何事もなかったような顔で身体を起こした。

「わたくしのことは心配御座いませぬ。早くお行きください」

「そんなこと言われても困るんですケド？」

「光さまはゴールを目指せばいいので御座います。それでは、失礼いたします」

バタつと、再びあやめさんは地面に倒れた。ワザとやってるのか、このメイドさんは!？

ふと、俺が横を見ると明日菜ちゃんが慌てふためいていた。

「ローズマリーさま、しつかりなさってください」

「明日菜くん、ボクは……もうダメだ……お腹が空いて動けない……

……なんちゃって」

「こんな時に冗談なんて言わないでください」

「お腹が空いたのはホント。でも、もう走れないよ」

「そんな……」

明日菜ちゃんはローズマリーの手を取り、互いを見詰め合う二人。俺は断じて許さんぞ、この光景！

まだ、先に行こうとしない俺のせいか、あやめさんが再び上半身を起こした。

「光さま、早く『行け』と申し上げております」

ニッコリ笑顔のあやめさんだが、目の奥が笑ってない。逆らったら殺されそうだ。でも。

「無理だから」

ハッキリと言ってしまった。かなり死を覚悟した。俺って度胸あるっ。

「光さま」

「何で御座いましょうか？」

「淡々した口調のあやめさんに思わず変な言葉使いで返してしまっ
た。」

あやめさんは怒らなかつた。

「勝ってください。わたくしに言えるのは、それだけで御座います。
後はご自分でどうにかしてください……うつつ」

また、あやめさんは倒れた。恐らく演技だ。

……後は俺ひとりですらどうにかしろって、責任逃れか！

横を見るとまだ明日菜ちゃんは慌てふためいていた。

「私が担いでもローズマリーさまをゴールまでお運びいたします
から、立ってください！」

「だ〜か〜ら〜、お腹が空いて力がでないよ」

ローズマリーは地面にゴロンと寝転がって、全くヤル気なしとい
った感じだ。

「ローズマリーさまあー！」

「明日菜くん、まだ気づかないのかい？」

「なにがですか？」

突然どこからか水着のお姐さんが走ってきて、ホイッスルを強く
鳴らしてローズマリーを指差した。

「失格です！」

「言われなくも知ってるよ」

ローズマリーは気だるそうに言うと、地面に落ちていたねこ耳を
拾い上げた。なるほど、ねこ耳が外れたから失格なのか。俺は平気
か！？

俺は急いでねこ耳が付いてるか確認した。よかった、付いてる。

あのゴロゴロで取れなかつたなんて、スーパーミラクルツイてるぞ。
そして、スーパーミラクルツイでグッドアイデアが浮かんでし
まった。

「明日菜さん、俺とペア組んでください」

「えっ!？」

明日菜さんは口をぽかんと開けた。その横にいたローズマリーが手錠の鍵を出して、自分と明日菜ちゃんの腕を解放した。

「ボクはどうせ失格だから、こいつと行くといいよ」

ローズマリーの言葉を聞いてあやめさんが立ち上がった。

「それはいい考えで御座います。ぜひとも鈴木明日菜さんとお行きください。審判さま、ペアを組み直すのはルールにないはずですが？」

これを言われた水着のお姐さんは戸惑いの表情を浮かべた。

「ええ、そのようなルールはありませんが……ですが……」

あやめさんの目つきがキツくなる。

「問題ないのですね。ないなら結構で御座います。光さま、先を急いでください」

あやめさんは手錠で俺と明日菜ちゃんを繋いだ。

見詰め合う俺と明日菜ちゃん。明日菜ちゃんは驚いた顔をしながらも、少し顔を紅くして小さな声で承諾した。

「よろしくおねがいします」

つまりそれって大団円？

遅れを取った俺たちだが、ゴールを目指して力の限り突き進んだ。最初、明日菜ちゃんはパニック状態だったけど、いつの間にか突っ走る俺に息を合わせて走ってくれていた。

横を走る明日菜ちゃんの息遣いが、俺の鼓動を高鳴らせる。

明日菜ちゃんの汗が夏の陽を浴びて、キラキラと輝く。爽やかだ、オッサンの汗とは成分が絶対に違う。

いつしか俺と明日菜ちゃんは阿吽の呼吸で走り、次々とライバルたちを抜かしていき、ついにトップに踊り出た。阿吽の呼吸っていうのは俺の勝手な思い込みだけど。

真剣に走る明日菜ちゃんの横顔って素敵だなあ。なにかを真剣に取り組む女性って素敵だと思う。

ダメだ、カワイイすぎて、俺のトキメキメーターがリミットを越えようとしている。

明日菜ちゃんがふと俺に顔を向ける。

「どうかしましたか？」

「明日菜さんってカワイイですね」

「えっ、あっ……」

「明日菜ちゃん愛してる！」

「えっ……」

言ってしまった。俺はついに禁断の愛の呪文を唱えてしまった。

俺の呪文はすぐに効果を表した。

石化呪文炸裂！

明日菜ちゃん硬直みたいだ。

動きを止めた明日菜ちゃんに合わせて俺の動きも自動的に止められた。けど、勢いがついたせいで俺がぶっ飛ぶ。すると、オプシヨーンとして今なら明日菜ちゃんもぶっ飛ぶ。

俺と明日菜ちゃんは今もつれ合いながら地面を転がり、俺は全神経

を集中して明日菜ちゃんを守りきった。と思った。

明日菜ちゃんの膝からブラッドが、紅い血が流れ出てるじゃありませんか!?

俺のせいだ。俺が怪我をさせたも同然。ジエントルマン俺としての名に恥じる行為をしてしまった。俺ってサイテーだ。

「明日菜ちゃん、大丈夫？ 本当にごめん……俺のせいで……」

「大丈夫です、先を急ぎましょう」

「本当にだいじょぶ？」

「はい、だいじょう……うっ」

立ち上がるうとした明日菜さんが顔を苦痛に歪めた。

「ダメじゃんやっぱり」

「いえ、大丈夫です」

そう言いながらも明日菜さんは俺の肩にもたれていた。

トップを走っていた俺たちだったが、いつの間にやら後方から傷ついた戦士たち、じゃなくなつて出場者が走つて、じゃなくなつて歩いてきている。ちなみに俺は無傷だが、その理由はメイドさんのお陰だったりする。

ヤバイ、このままじゃ負ける。

思い立ったら即実行。俺は明日菜ちゃんの身体をお姫様抱っこで持ち上げた。

「なにするんですか!？」

「これでゴールまでひとつ走りしかないかなあ、と思つて」

俺は明日菜を担いで体力の続く限り全力で走つた。火事場の何とか力の発揮。

ゴールはすぐそこだった。このままゴールに向かってレッツゴーだ。

サン・ハルカ広場に集まる人々から歓声が上がる。

そして、俺は明日菜ちゃんと急遽ペアを組んで一位でゴールを果たした。燃え尽きたぜ。

明日菜ちゃんを地面に下ろして俺は力尽きた。もう、走れない。

というか、一生走りたくない。

天から神々しい光が地面に降り注ぐ。俺を向かいに来たのか……でも、猫だ。天使の羽を生やした猫が天から降りてくる。

猫は俺の近くに降りた。それを見て明日菜ちゃんが恭しく頭を下げた。

ああ、なるほど、だから『爆々ねこレース』なのか。つまり、ハルカ教の神は猫だったのか。

猫が人語をしゃべった。まあ、神ってくらいだから驚くことじゃない。

「こんにちは、わたしの名前はハルカです。えっと、カミサマやってます」

俺は啞然とした。カミサマっぽくねえ！

「マジでカミサマっスか？」

「はい、いちようカミサマやってます。えっと、優勝したのってお二人ですよ。願い事聞きますけど、どうしますか？」

「ちよつとお待ちください！」

水着のお姐さんが話に割り込んで来た。

「このお二人はペアを組み直しています。それはルール違反には当たらないのでしょうか？」

さっきの水着のお姐さんはあやめさんがうまく丸め込んだが、今度のお姐さんはどうにもならなかった。

考え込むカミサマ。

「うーん、わたしはルールに関しては一切関知してないですよ。え。でも審判さんがそういうんなら、ルール違反なのかなあ。じゃ、そういうことでわたしは帰ります」

カミサマは何もせず天に帰ってしまった。何しに来たんだよ！

俺は結局願いを叶えてもらえなかった。無念だ。

「……無念だ。せつかく、明日菜ちゃんとの愛をカミサマに取り持つってもらおうとしたのになあ」

「……白金さん？」

「なに明日菜さん？ ああ、手錠外さないと」

俺が手錠を外そうとすると、明日菜さんが俺の手にそつと織手を乗せた。

「外さなくてもいいです。もうすぐ花火が打ち上げられるんですけど、このまま見に行きませんか？」

「はい？」

「行きましょう」

理解できなかった。明日菜ちゃんの行動が掴めない。

辺りは夕暮れに染まり、俺は明日菜ちゃんに引きずられるままにゴンドラに乗った。

「明日菜ちゃん、何でゴンドラなんか？」

「ここから見る花火が一番綺麗なんですよ」

「だから？」

「さきほどの言葉、もう一度言ってもらえますか？」

さきほどの言葉って何だっけ？

「さっきの言葉ってなんスか？」

「ゴール前にわたしを抱きかかえる前に言った言葉です」

「……あつ」

わかったけど、あの時は勢いで言っちゃったし。こうやって改めて言うのはハズい。

俺のこゝろを見つめる明日菜ちゃん。そんな目で見ないでくれ、沸騰しそつだ。

黙り込んでしまった俺のことを横にいた誰かが肘で突付く。

「光さま、早くお言葉を申し上げてください」

「げげつ、あやめさん!？」

私服に帽子を深く被ってだから気づかなかつた。

うわつ、しかも、あやめさんの横にはローズマリーまでいるし！

あやめさんは胸元から手錠の鍵を取り出した。

「光さまが『明日菜さま』に気持ちを伝えないと、手錠の鍵を外しませんよ」

「それは困るけど、あやめさんとかがいる前で……」

「わたくしたちは証人でございますから」

「ボクらが証人になるって言うてるんだから、早く明日菜クンに告白しちゃいなさい」

意味わかんねえ。この展開、意味わかんねえ。

明日菜ちゃんは俺のことをまだ見つめている。

高まる俺の鼓動。

言わなきゃいけないのか。言うべきなのか。これって言わされてるのか!?

「あの……明日菜ちゃん……」

「はい」

「俺は明日菜ちゃんのことを世界で一番愛してる!」

長い間があつた。そして、明日菜ちゃんが小さく頷いた。

「……わたしも白金さんのことが好きです」

「マジですかマジですかマジですかマジですか!?!」

明日菜ちゃんは小さく頷いた。

ローズマリーと固い握手を交わしたあやめさんが俺に最高の笑みをくれた。

「おめでとう御座います光さま。そして、改めましてご紹介いたします。こちらにいらっしやるのが、紅薔薇派代表の鈴木明日菜さまでございます」

「はあ!?!」

じゃあ、ローズマリーは何者だよ!?!

「ボクも改めて自己紹介するよ、ボクはハルカ教の教皇ローズマリー十六世。まあ、これで紅白が統合してくれて、ハルカ教も安泰だね」

「はあ!?!」

俺は意味がわからなかった。

どこからか花火の打ち上がる音が聞こえた。

日が落ちた空に火華が咲き乱れる。

呆然としている俺の顔に明日菜ちゃんの顔が近づいてきて……。
ゴンドラの上から見る水面を彩る花火の影はとても美しかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0272e/>

爆々ねこレース

2010年10月8日14時08分発行